台湾のみなさまへ──「障害」と「健常」の逆転劇

　私が、『こんな夜更けにバナナかよ』というノンフィクション作品を刊行したのは、2003年のことです。それから15年以上がたった今、この本を原作とした映画がつくられ、台湾のみなさまにもご覧いただけることを大変喜んでいます。

　主人公のさんは、筋ジストロフィーで自分の手足さえ動かせない重度の身体障害者です。しかし、その性格は、とても「わがまま」で厚かましく、おまけにエッチなところもある煩悩のかたまりみたいな人です。おそらく多くの人たちが「障害者」に対して抱きがちな「聖人君子」のイメージとはかけ離れていることでしょう。

　一方、鹿野さんを支えるボランティアの若者たちもまた、よくイメージされるような、善良で献身的な若者たちという像とは違って、それぞれが人生に悩みや生きづらさを抱えているごく普通の若者たちです。

　そんな彼らが繰り広げる日常とは、不思議な人間関係の逆転劇の連続でした。たとえば、身体的には誰よりも不自由さを抱えているはずの鹿野さんが、誰よりも自由な存在に思える面がありますし、周囲の支えなしには生きられない境遇でありながらも、したたかに図太く生きる鹿野さんに刺激され、多くの若者たちが成長を遂げていきます。

　私は本を書く過程で、いったいどちらが障害者で、どちらが健常者なのか。どちらが支える側で、どちらが支えられる側なのか、何度もわからなくなるほどでした。

　結局、人と人が支え合って生きることの意味とは、まさにこういうことなのだと、私は鹿野さんとボランティアたちとの関係を通して教えられたのです。

　映画では、こうした原作の核心部分を誰にでもわかりやすく、そして、笑って楽しめるエンターテイメントとして成立させた優れた作品に仕上がっています。

　とりわけ主演の大泉洋さんは、「わがままな障害者」という前代未聞の役どころをみごとに演じ切り、実在した鹿野さんの魂を凝縮したかのような熱演を繰り広げています。

　この映画を通して、一人でも多くの人が、障害や福祉の問題はもちろん、人と人が支え合って生きることの意味について、考えを深めるきっかけにしていただけたら、原作者として、これ以上にうれしいことはありません。

２０１９年４月９日

『こんな夜更けにバナナかよ』原作者

ノンフィクションライター

［渡辺一史（わたなべ・かずふみ）／プロフィール］

ノンフィクションライター。1968年、名古屋市生まれ。北海道大学文学部を中退後、北海道を拠点に活動するフリーランスのライターとなる。2003年に刊行した『こんな夜更けにバナナかよ』（北海道新聞社、2013年に文春文庫）で大宅壮一ノンフィクション賞、講談社ノンフィクション賞を受賞。2011年に刊行した『北の無人駅から』（北海道新聞社）でサントリー学芸賞、地方出版文化功労賞などを受賞。他の著書に、『なぜ人と人は支え合うのか』（筑摩書房）がある。北海道札幌市在住。